

## 受信と送信



池田 憲二\*

昨年の4月1日付で審議役を拝命し、9年ぶりの研究所勤務となりました。今回は組織の管理と運営を行う役職ですが、研究員らと2度の海外出張を命じられました。出張先で感じたことを述べたいと思います。

昨年9月にスイス連邦工科大学チューリヒ校（以下、ETH）を当研究所の寒地構造チームのメンバーとともに訪問しました。ETHと寒地構造チームは落石衝撃力や落石防護工の性能設計に関し、国際共同研究を行っています。ETHが日本の国土交通省道路局に相当するスイスの機関から獲得した外部資金と寒地構造チームの研究費を用い、寒地構造チームが当研究所の角山実験場で実験を行いました。今回の訪問は実験結果のレビューと今後の研究方針を策定するためのものでした。

そもそもこの共同研究のきっかけは2005年に構造研究室（当時）が落石衝撃力と構造物の応答に関する研究成果を発表するため、ポルトガルで行われた「国際橋梁構造工学会議」（IABSE）に参加したことにあります。自分たちの研究成果を積極的に発信し、同時に世界の研究動向やその成果について情報を収集している中で、同じ分野の研究をしていたETHの研究員との交流が始まりました。権威ある国際会議の場に参加したことが更なる研究の進展につながったのです。

後にこの研究員は世界の落石問題に関する研究を大成した書籍を諸外国の研究者らと共同して出版しましたが、当研究所の研究内容と発表論文もしっかりと掲載されています。

また昨年10月には、当研究所の5研究チームのメンバーと中華人民共和国新疆ウイグル自治区のウルムチで開催された「第12回日中冬期道路交通ワークショップ」に参加しました。同ワークショップは中国北部地域との技術交流と日本の技術移転を円滑に行うために日中で交互に開催され、日本で開催される時は当研究所が主催者の一員になります。私は初めての参加で

したが、ふたつのことに感銘を受けました。

ワークショップで中国側の発表を聞いていると、冬の道路交通の課題に対する解決策の中には、日本と同じものがあるということに大変驚きました。例を挙げると、吹雪による視界不良時に路肩位置を示す矢羽、吹き溜まりのできにくい道路盛土構造、防雪林、凍上抑止層を含む舗装構成、アスファルトの配合など。この私の発見と一緒に参加した当研究所の研究員に話したところ、それらはすべてこのワークショップを通じて日本から技術移転された結果であり、当研究所の成果でもあるとのことでした。広く海外にも積極的に発信することの大切さを再認識しました。

ところで国際会議であれば英語の使用が普通ですが、日本側が発表に用いたパワーポイントは、中国側の要請で日本語のものが使われました。私はそれだけではなく、通常はカタカナで表記される言葉もほとんど日本語、すなわち、漢字表記されていることに気づきました。専門家でしかわからないであろう単語、たとえば混凝土（コンクリート）とか、明らかに無理してカタカナ英語を日本語に意識したのであろうと思われるものが随所に使われており、漢字が理解できる中国側に対する思いやりと丁寧に発信しようとする当研究所研究員の姿勢に感銘を受けました。

当研究所は独立行政法人化以来、評価委員会において外部の有識者から厳しい評価を受けることになりました。ただ研究をしていけばよいのではなく、成果を世に問い、使われ、普及させて初めて高い評価が得られます。最近、情報収集を怠るなという意味で、「アンテナを高くして」という言葉がよく使われますが、アンテナは受信のためだけではなく、送信にも使われます。私たちはその高く掲げたアンテナをバランスよく受信と送信の両方に活用し、研究の高度化と成果の普及に努めていく所存です。関係各位のご指導をよろしくお願い申し上げます。

(独)土木研究所理事長代理 寒地土木研究所長（前審議役）\*